



EBRDのチームメイトたちと(前列左が著者)。多国籍な職場(全員、国籍が違う)はUWCでの日々を思い出す

目に香川県高松市に転勤した。私にとって高松はカナダよりもよっぽど外国だった。言葉も商慣習も何から何まで違う。土地の共同体としての絆が非常に強く、わからないルールがたくさんある。が、ここでもカナダで身につけた「根気よく話を聞いてくれる人を見極める嗅覚」に助けられた。心優しい同僚に多くのことを教わって、どうにか無事に三年の任期を終え東京の本社に戻った。

### 再び動き出した時計の針

私はリユニオン終了後の八月にニューヨーク

ークに転勤となり、9・11直後の一年間をアメリカで過ごすこととなった。カレッジを卒業して一〇年、海外とはほとんど縁のない生活をしてきたが、リユニオンを境に海外関連の仕事ばかりに従事することとなった。京都・東京・高松で過ごした一〇年の間に学んだことは、自分の日本人としての土台を強くしていたようで、久しぶりの海外生活を楽しむ余裕ができていた。

日本に帰国後、アメリカに子会社を設立するプロジェクトを終えて、結婚を機にロンドンに生活の拠点を移すため二〇〇五年に九年勤めた会社を辞した。

### 国際公務員に

現在、私はロンドンの欧州復興開発銀行(EBRD)で銀行資産のリスク管理スペシャリストとして働いている。EBRDはベリリンの壁崩壊で加速された、中東欧諸国における民主主義・市場経済への移行を支援するため、一九九一年に設立された国際開発金融機関で、東欧・旧ソ連諸国・中央アジアの民間セクターを中心に投融资や技術支援を行っている。私の仕事は、外部から調達した資金の管理・運用に関連する諸々のリスクを分析し、資金が確実に流れ

プロジェクトが実行できるようにすることとで、クレジット・クランチの真っ只中の今、非常に重要な役割となっている。このリスク管理の仕事は商業銀行にもあるポジションだが、国際開発金融機関は「収益をあげる(儲ける)」以外の明確な社会的ミッションがあるため、私にとっては非常に働きやすい。また、スタッフの国籍が六〇カ国以上にのぼる多国籍な職場環境はUWCを彷彿させ、刺激的でとても居心地がいい。

そして、ここにもUWCのネットワークが活かしている。財務担当副総裁がアトランティックカレッジ出身で、現在UWC国際理事会メンバーでもあるため、彼を中心にUWC出身のEBRD職員が定期的に集まり、寄付金集めや卒業生ネットワークの活用などについて話し合っている。二〇〇二年のリユニオン以降、UWC関連のことに関わる機会が飛躍的に増え日常化してきている。まさに、私の中のUWCの時間が再び動き始めた。改めて思うのが、UWCの経験が私の強いバックボーンになっているということだ。卒業生として、この組織が半永久的に存続していけるよう微力ながらサポートしていきたいと思っている。

# 生涯続くUWCの縁

一九九二年UWCカナダ・ピアソンカレッジ(PC)卒。  
一九九七年京都大学法学部卒、三井海上火災保険 現三井住友海上火災保険)入社。二〇〇七年MDインタール・ナショナルにてMBA取得、二〇〇八年より現職。

欧州復興開発銀行(EBRD)  
シニアリスクマネージャー

藤井佐知子  
ふじい さちこ

二〇〇二年六月、私は一〇年ぶりに懐かしいバンクーバー空港に降り立った。期待を胸にカナダの地を初めて踏んだあの日の興奮がフラッシュバックする。逸る気持ちを抑え、小型機に乗り換え空路ビクトリアへ。これからカレッジで行われる一〇年目のリユニオン(同窓会)に参加するのだ。

ピアソンカレッジでは一〇年ごとにリユニオンが行われる。家族同伴での参加も可能で、開催期間中はカレッジの寮に泊まり、食堂で留学中と同じメニューの食事をし、さまざまなイベントやアクティビティーを楽しむ。さすがに一〇年の歳月は同級生の外見をかなり変えていて、カレッジに着いてすぐは誰が誰なのかわからなかったが、二言三言話すと思えば出がよみがえり「あの頃」にすぐに戻れてしまう。

## 🌟カレッジでの二年間

カレッジでの生活は「英語」という人生最大の壁に立ちほだから右往左往する日々だった。毎晩「明日になったら英語がペラペラになってる」という都合のいい妄想とともに眠りにつく。もちろんそんな明日は来ることはなく、人の言っていることがわかるようになるよりも、人の言っていることが全部わからなくてもどうにか生きていける、ということを先に学んだ。

そんなサバイバルな生活の中では、つたない英語でも根気よく話を聞いてくれる人かどうかを見極める嗅覚が非常に発達してくる。不幸にも私に選ばれてしまった、人のいい同級生たちと、週末に時間を忘れ夜を徹して色々なことを話し合うのが楽しく

●(社)ユナイテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四二四名の卒業生を輩出している。

て仕方がなかった。

だが、話が文化や習慣のことになると、自分がいかに自国のことを知らないかを思い知らされた。日本紹介本を読んでもっともらしいことを説明してみても「何でそうするのか?」「いつから始まったのか?」などの踏み込んだ質問にはまったく答えられない。また、自分はこうだ、と自信を持って主張できず、アイデンティティー・クライシスに陥っていた。今まで「留学したい」と思って外にはばかり目が向いていて、自分のルーツにきちんと向き合ったことがなかったのだ。

この思いは二年間を通してずっと私の心に引っかかり続け、最終的に日本の大学に進学することを決めた。京都での四年間は違った意味で非常に刺激的で、学内だけでなく京都の地の方々々と親しくさせていただき、人として大切なことをたくさん教わった。卒業後は損害保険会社に就職し、二年